そばに置きたい

「安くて良い」漆のおわん

最近は、一見しただけでは木なのかプラスチックなのか分からないおわんがあふれています。紹介するのは、もちろん木に漆をかけたおわんです。

日本三大うどんの一つ、稲庭うどんの里として有名な秋田県湯沢市には、川連（かわつら）という町があります。古くは鎌倉時代に武具に漆を塗ったのが起源とされる「川連漆器」で有名な地です。

漆のおわんは高いイメージが強いと思いますが、川連漆器は良くも悪くも「安物」の代名詞でもあります。とは言っても、質が良くないから安いのではありません。

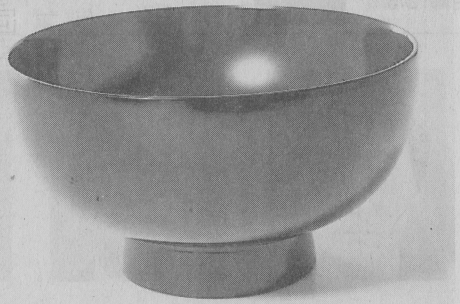
材料として使うブナ・トチは県内で採れる。人件費は全国的に見て低い。変形しやすいという弱点があるが、割れにくい木地を使っている―。これらの理由から安く抑えることができているのです。

今回紹介したおわんを作っているのは、佐藤善六漆器店です。明治時代のはじめ、1872年の創業で、現在は6代目の佐藤徹さんが当主を務めています。

佐藤さんは「安くていいもの」を作る職人です。おわんの台を通常のものより少し高くすることで、持ちやすい形になっています。

ここで作ったものに別の業者が金箔（きんぱく）を貼るおわんもあるのですが、金箔がなくても十分見栄えします。

（手仕事フォーラム代表　久野恵一）



黒漆内古代朱（弁柄）椀（くろうるしうちこだいしゅ（べんがら）わん）　直径11.4㌢、高さ6.6㌢。税抜き3200円。問い合わせは久野さんが関わる「手しごと」（電話03・6432・3867、火曜定休）へ。　外山亮一撮影